15年ぶりの洞爺湖開催
縄文シティサミットinとうや湖

時を超え つながる文化

18都市が縄文文化を語る

縄文遺跡を抱える全国の自治体が、縄文文化について意見を交わす「縄文シティサミットinとうや湖」が、10月7日、洞爺湖文化センターで行われました。

サミットは町では15年ぶりの開催となり、縄文都市連絡協議会に加盟する18都市の首長などが参加しました。

記念講演では、伊達市噴火湾文化研究所の学芸員を務め、現在は東北芸術工科大学准教授の青野友哉氏が登壇しました。縄文時代の装飾品などが、産地から遠く離れた場所で発掘された事例などを挙げ「6千年前の関東や西日本で文化圏を超えた情報と物のやり取りがありました」と説明。「縄文のネットワークは世界遺産でひとくくりになった同じ文化圏だけではありません。世界遺産ではなくても縄文遺跡は価値があるということを考えてほしいです」と強調しました。

首長会議ではそれぞれの縄文遺跡の特徴を紹介。下道町長は「入江・高砂貝塚では縄文時代の活発な漁労活動を示すホタテやカレイなどの骨が多数出土しています」など特徴を説明しました。

縄文文化について解説する青野氏

各都市の縄文遺跡を紹介した首長会議